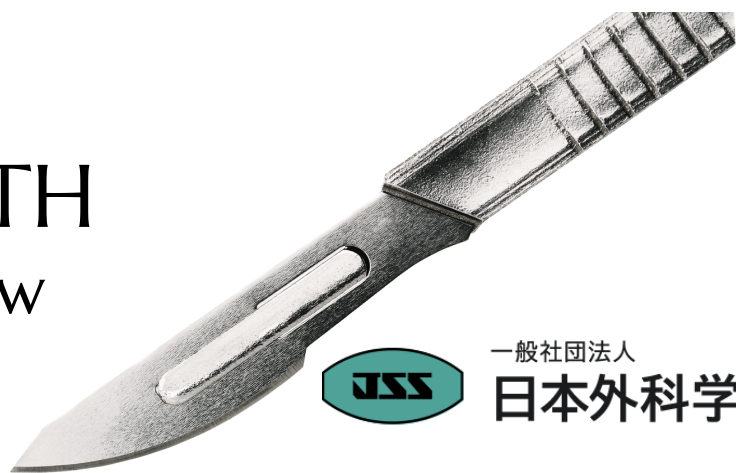


BUILD YOUR PATH

Role Model Interview



村上 朱里 先生 乳腺外科医

PART 1 : BUILD 「あなたは何を築いてきましたか？」

Q1. まずは、現在の肩書やご専門分野について教えてくださいませんか？

現在は愛媛大学医学部附属病院の乳腺センターで、乳腺外科医として主に乳癌診療を担当しています。

乳腺外科の大きな特徴ですが、手術を行って終わりではなく、その後の薬物療法や長期間の経過観察まで、一貫して患者さんに関わらせていただきます。そのため、医師だけでなく多職種で連携を取りながら日々診療にあたっています。

また、現場での診療に加えて、より良い医療につなげるための臨床研究や、JBCRG（日本乳癌臨床研究グループ）のメンバーとしての取り組み、さらには「乳癌学会MIRAY1」などを通じた若手医師の勧誘や中堅世代のキャリア支援といった教育活動にも力を入れています。

Q2. 医学生や研修医の頃は、どのような医師を目指していらっしゃいましたか？

学生時代から根底にあったのは、「目の前の患者さんとしっかり向き合える医師になりたい」という強い思いでした。実は、最初から外科を目指していたわけではなくて、学生の頃は児童精神科など、今とは全く違う領域に興味を持っていたんです。それが大きな転機となったのは、臨床研修で外科を回った時でした。

自分の手で行う手術によって患者さんの力になれること、そして一つのチームで一人の患者さんを全力で支える外科医療の熱量に深く魅了され、「外科医として歩んでいこう」と決意しました。

Q3. 数ある外科領域の中で、最終的に「乳腺外科」を選ばれた決め手は何だったのでしょうか？

外科にはどの分野にも独自の魅力がありますが、私が乳腺外科を選んだ一番の決め手は、「患者さんと息長くお付き合いができること」でした。乳癌診療では、手術はもちろん、術前・術後の薬物療法、そして10年以上にわたる経過観察まで、一人の患者さんの人生に長く伴走します。根治性を追求することは大前提ですが、同時に整容性や治療後の生活の質（QOL）にも配慮し、多職種とチームを組んで一人ひとりに最適な医療を模索できる点に大きなやりがいを感じました。

また、当時、地方大学では乳腺外科を専門に掲げる関連施設はまだ限られていました。そうした環境の中で乳腺外科という専門性を深めていくことにも面白さを感じましたし、もともと研究に取り組むこと自体が好きだったこともあって、臨床と研究を両立できるこの分野が自分に合っていると感じたんです。

Q4. 若い頃に思い描いていたキャリアと比べると、現在はどのくらい一致していますか？

ほぼその通りですね。

「患者さんにしっかり寄り添いたい」という基本姿勢は、昔も今も全く変わっていません。自分で手術を行い、画像診断をし、トータルで診ることができるという乳腺外科の魅力に惹かれて飛び込みましたが、思い描いていた通りのやりがいを感じながら診療できています。

変わったことと言えば、経験を重ねるうちに「自分一人で患者さんを診る」だけでなく、臨床研究や若手教育を通して、より多くの患者さんや次の世代の医師たちに貢献していきたいという思いが自然と強くなってきたことでしょうか。そういった意味でも、非常に充実したキャリアを築けていると感じています。

PART 2：PATH「あなたの歩んできた道」

Q1. これまでのキャリアの中で、特に大きな分岐点や「自分のPATHを作った」と思える出来事は何でしたか？

卒後7年目で大学院に進学し、乳癌の基礎研究に取り組んだことが一つの始まりでした。当時はピペットを握り、細胞を相手にシグナル伝達やタンパク質の解析など、生化学寄りの研究を行っていました。最初は手探りでしたがやってみると案外面白く、「仮説を立てて検証する」という研究のプロセスから非常に深い学びを得ました。

そして、大きな転機となったのが、大学院生だった卒後9年目の時にいただいたアメリカの「MDアンダーソンがんセンター（MD Anderson Cancer Center）」への短期研修です。数週間という短い期間ではありましたが、世界トップレベルの乳癌診療を目の当たりにし、多職種がそれぞれの高い専門性を発揮しながら「患者さん中心の医療」を徹底して実践している姿に強い感銘を受けました。

この経験を通じて、「目の前の患者さんを診ること」と「診療をより良くするために研究や教育に取り組むこと」は地続きでつながっているんだと実感しました。現在の私の診療姿勢や研究に対するマインドは、間違いなくこの時期に形作られたものです。

Q2. 「乳腺外科を選んで本当に良かった」と感じる瞬間や、印象的なエピソードを教えてください。

やはり、治療を終えた患者さんが元気な姿で外来に来られて、「仕事に復帰できました」「旅行に行ってきました」と笑顔で話してくださる瞬間ですね。

乳癌診療は患者さんとの付き合いが非常に長く、外来を担当するようになってからは、患者さんの人生のさまざまなイベントと一緒に共有させていただいてきました。「結婚しました」「子どもが生まれました」「孫ができたんですよ」といった報告を笑顔で受けるたびに、その方の人生の節目に寄り添っている喜びを実感します。こうして長期間にわたり患者さんの人生の歩みを見届けられることは、乳腺外科医ならではのかけがえのないやりがいです。

Q3. 外科専門医の取得や若手時代の外科研修での経験は、現在のキャリアにどのような影響を与えていますか？

専門医取得までのプロセスで得た最大の財産は、「患者さんを全身から診る視点」と「どんな局面でも最後まで責任を持つ姿勢」です。

あえて振り返ると、若手時代に消化器外科で積んだ経験は特に深かったと感じています。非常に大変な全身状態の患者さんと向き合い、「この患者さんをどうにかして救うんだ」と粘り強く治療にあたった経験が、今の私の基盤になっています。

現在専門としている乳腺外科でも、その時に培った基本的な考え方や判断力、技術がそのまま活かされています。どんなに複雑な病態であっても、患者さん一人ひとりにとって最適な医療を多職種と協力しながら提供できる外科医であり続けたいですし、日々の診療で感じた疑問や課題を研究に還元し、その成果を再び患者さんにお返しできるよう、臨床・研究・教育の3つを大切にしながら歩んでいきたいと思っています。

PART 3：NEXT PATH「これから歩く人へ」

Q1. もし今、ご自身が医学生や研修医時代に戻れるとしたら、当時の自分にどんな言葉をかけてあげたいですか？

「焦らなくて大丈夫だよ」と優しく声をかけてあげたいですね。

実は私自身、学生時代は児童精神科一本で考えていて、それ以外の選択肢は頭になかったんです。それが研修医になって突然外科の面白さに目覚めてしまって...。「こんなにガラッと志望を変えて大丈夫なのかな？」と戸惑っているうちに、あっという間に研修2年目が来て焦ったのを覚えています。

でも振り返ってみると、最初から進むべき道が完璧に決まっている必要なんて全くありませんでした。当時は「子どもを診たい」というよりは「患者さんと長くお付き合いしたい」という点が自分の中で一番重要なキーポイントだったので、色々な科を経験する中で乳腺外科という最適な道に行き着くことができました。

だからこそ、研修医の皆さんには「色々な診療科を回って、たくさんの患者さんや先生方との出会いを大切にしてほしい」と伝えたいです。その経験の積み重ねが、必ず自分らしい医師としての道を作ってくれます。

そしてもし、「この分野で頑張りたい！」と思えるものに出会えたなら、ぜひ思い切って飛び込んでみてください。自分で悩み、納得して選んだ道であれば、後悔することはまずありません。そこ

で重ねた努力や経験は、必ず自分自身の大きな力となり、新しい未来を切り拓いてくれますよ。

Q2. 最後に、外科を目指すか迷っている若い先生方へ、一番伝えたいメッセージをお願いします。

外科という分野は、自分の手で技術を磨き続けながら、患者さんの人生にとっても深く関わることができる、本当にやりがい満ちた世界です。

その中でも私が携わっている乳腺外科は、患者さんと長期間にわたって信頼関係を築き、多職種のチームで協力しながら、その方らしい生活や人生まで見据えた医療を実践できる素晴らしい診療科です。

もし少しでも興味を持っていただけたなら、ぜひ一度乳腺外科の現場を見学しに来てください！実際の診療の雰囲気や、チーム一丸となって患者さんを支える魅力を直接感じていただけたら嬉しいです。皆様と一緒に働ける日を楽しみにしています。